

お　お　や　よ　こ　あ　な　ぐ　ん

# 大谷横穴群

掛川市農協製茶工場用地増設に先立つ埋蔵文化財発掘調査報告書

2001.3

掛川市教育委員会



## 例　　言

1. 本書は、静岡県掛川市千羽字八重川1290外における大谷横穴群の発掘調査報告書である。
2. 調査は、掛川市農業協同組合の製茶工場用地増設に先立ち掛川市教育委員会が実施した。  
発掘調査の費用は、掛川市農業協同組合が負担した。
3. 現地調査は平成11年4月16日～6月2日まで行い、整理作業は平成12年11月2日～平成13年3月15日まで行った。
4. 発掘調査、本書の執筆、編集は、掛川市教育委員会の井村広巳が行った。
5. 本書に係る発掘調査の記録及び出土遺物は、掛川市教育委員会が保管している。
6. 插図における方位は真北を示す。
7. 插図中の標高は海拔を示す。

## 目　　次

I	調査に至る経緯と調査の目的	2
II	調査の方法と経過	2
III	遺跡をめぐる環境	3
IV	調査の成果	7
V	まとめ	10

## 挿図目次

第1図	位置図	2
第2図	周辺遺跡分布図	4
第3図	大谷横穴群全体図	5
第4図	30・31・32号実測図及び出土遺物実測図	8
第5図	確認調査出土遺物実測図	9
第6図	横穴変遷図	11

## 写真図版目次

写真図版1	大谷横穴群全景（東から）	12
	発掘区全景（南から）	12
写真図版2	調査前遠景	13
	重機掘削風景	13
	31号横穴検出状況	13
写真図版3	30号横穴（東から）	14
	31号横穴完掘（南から）	14
写真図版4	32号横穴（南から）	15
	32号横穴完掘（東から）	15
写真図版5	出土遺物	16

# I 調査に至る経緯と目的

大谷横穴群は、昭和35年（1960）掛川西高校郷土研究部発行の『ふるさと』第14号と昭和39年（1964）『ふるさと』第18号により、その存在が紹介されている。の中では踏査した結果、12基の横穴の規模と数点の須恵器が報告されている。平成5年、掛川市農業共同組合による緑茶加工施設建設及び農地整備事業に先立ち実施された確認調査では、16基の横穴と丘陵上に遺構が確認された。その結果、工事計画が見直され、横穴は保存され、丘陵上の遺構のみが本発掘調査されることになった。しかしその後、静岡県中遠農林事務所より千羽・八坂2期地区道路新設工事計画が起り、横穴群周辺の造成が免れない状況となったため、平成10年7月～平成11年3月にかけて（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所によって発掘調査が実施された。調査では、30基の横穴を確認している。さらに平成10年には掛川市農業協同組合（以下掛川市農協）の製茶工場敷地増設計画が起り、残されていた大谷横穴群の破壊が免れない状況となった。そこで、掛川市農協と掛川市教育委員会が協議した結果、平成11年4月より発掘調査を行うことになった。

# II 調査の方法と経過

## 1. 調査の方法

現地は平成10年度に発掘調査が行われたままの状態であり、一部地山の砂泥岩が露出していた。土量が多いため重機による掘削を行った後、人力により横穴の掘削を行った。確認した横穴は、1／20又は1／10の縮図を人手により作成した。（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所が作成した図面と整合性を保つため、1／100の遺構全体図は業者に委託し作成した。写真撮影には、6×7判（モノクロ）1台と、35mm判（モノクロ、リバーサル、カラー）3台を使用した。調査区遠景、横穴群全景の撮影は業者に委託し、ラジコンヘリコプターを用いて写真撮影を行った。出土した土器は水洗いし、出土位置をマーキングし、接合復元した後、実測を行った。現地で作成した図面は、報告書用に編集し、清書した。そして調査によって得た成果を原稿にまとめ印刷に付した。

## 2. 経過

- |           |   |
|-----------|---|
| 平成11年4月8日 | 掛川市農協の本所で発掘調査の打ち合わせを行う。                         |
| 4月15日     | 掛川市農協より、発掘調査の依頼書が提出される。                         |
| 4月16日     | 掛川市農協と掛川市の間で、埋蔵文化財発掘調査協定書及び埋蔵文化財発掘調査委託契約書を締結する。 |
| 4月21日     | 人力により発掘を始める。                                    |
| 5月7日      | 重機掘削終了。   |
| 5月10日     | 3基の横穴を確認する。                                     |



第1図 位置図

- 横穴の掘削を始める。  
5月13日 各横穴の完掘写真を撮る  
5月18日 各横穴の実測を行う。  
6月2日 景観写真撮影。道具の撤収。現地調査すべて終了。  
平成12年11月2日 整理作業を行う。(～平成13年3月15日)

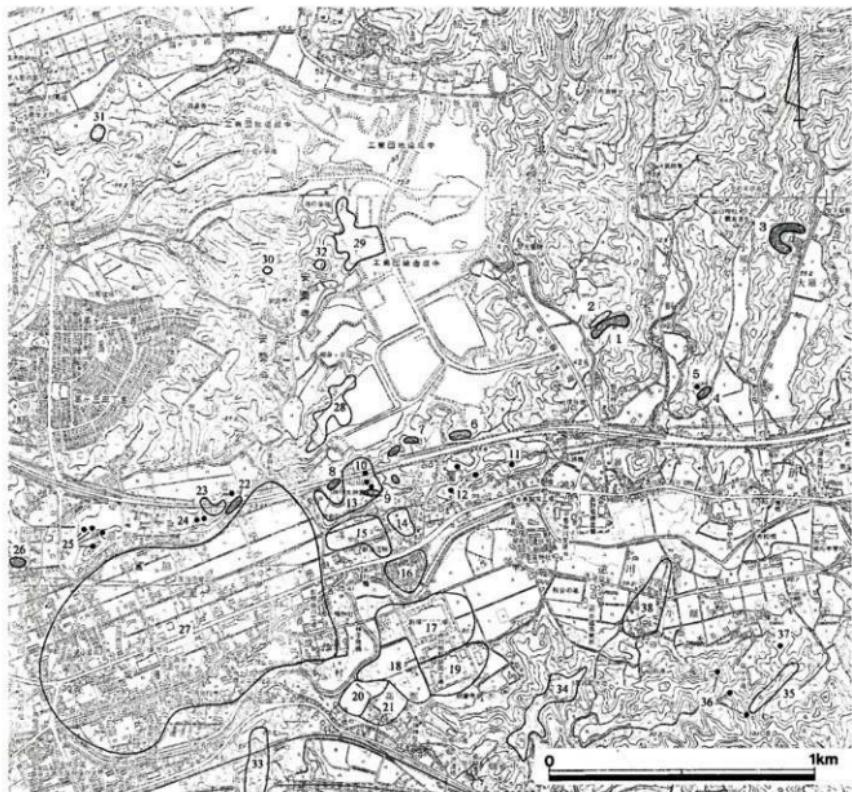
### III 遺跡をめぐる環境

大谷横穴群は、JR掛川駅から東へ約4km、国道一号線掛川バイパスの千羽インターチェンジから北へ約400mの丘陵斜面に位置する。横穴群の北方に位置する標高527.3mの栗ヶ岳から南に延びる丘陵は、逆川の支流である千羽川、木割川等によって開析された小さな谷とやせ尾根が複雑に形成されている。これらの丘陵の地層は、新第3紀中新世から鮮新世にかけて堆積された相良層群上部の満水泥層と掛川層群の堀の内砂泥互層によって構成されている。これらの地層は浸食されやすいため、谷が幾つも入り組んだ複雑な地形を造り出している。横穴の掘削にあたっては、築造しやすい条件を備えていたといえる。

次に大谷横穴群周辺の歴史的な動きを概観していくことにする。現在まで弥生時代以前の遺構は、この周辺地域から確認されていない。現在確認されている最も古いものは縄文時代中期で、土器や石器などが大六山遺跡と安養寺II遺跡で確認されている。この地域は東部工業団地（エコポリス）造成と国道一号線掛川バイパス造成を除き、大規模な発掘調査が行われていないが、どうも弥生時代以前の人々の生活の跡を知る遺跡は少ない。それが弥生時代中期以降、逆川流域の沖積地や丘陵上に集落が形成され始める。まず弥生時代中期には沖積地の神子地遺跡、原ノ前遺跡で方形周溝墓が、丘陵上では大六山遺跡で竪穴住居跡が発見されている。そして後期にはいると、この時期東遠江では段丘上に集落が爆発的に増加するという例にもれず、安養寺、安養寺II、深谷、峯山、山郷山、躰原、大六山といった遺跡で竪穴住居跡や方形周溝墓が数多く発見されている。これらの集落は、引き続き古墳時代前期へ継続しているものが多い。古墳時代中期になると集落は沖積地へ移動したとみられ、現在認められる丘陵上の遺構は、大六山遺跡の竪穴住居跡のみである。この遺跡は、弥生時代中期から始まり、断絶する時期があるものの平安時代まで集落は存続している。

一方、古墳時代後期になると集落の様相は明確にされていないが、逆川右岸の丘陵上には木棺直葬墳を、丘陵斜面には大谷横穴群をはじめとして、幾つもの横穴群が築造され始める。東から鐵谷、中屋敷、御堂ヶ谷、谷通、神明、山郷、山郷山、西田横穴群と挙げられる。山郷、谷通、御堂ヶ谷横穴群は掛川バイパス造成に先立ち、一部調査が行われている。これらの横穴群は、玄室横断面形がドーム形を呈していたようである。谷通A-1号横穴は、隅丸方形の平面形を呈し、1基で墓前域をもつ。玄室内には棺座を設け、その上に川原石を敷き棺床を造っている。また御堂ヶ谷A-1号横穴は、横長長方形の平面形を呈する。玄室内には長軸1.9m、短軸1.3mの大きさに人頭大的川原石を積み上げ、その周間と隙間に小礫を積み上げ、埋葬施設を作るという他に例のないものが認められている。そして、石と内側全面に赤色顔料を施していた。これらの横穴は、6世紀中葉から後半の築造といえる。

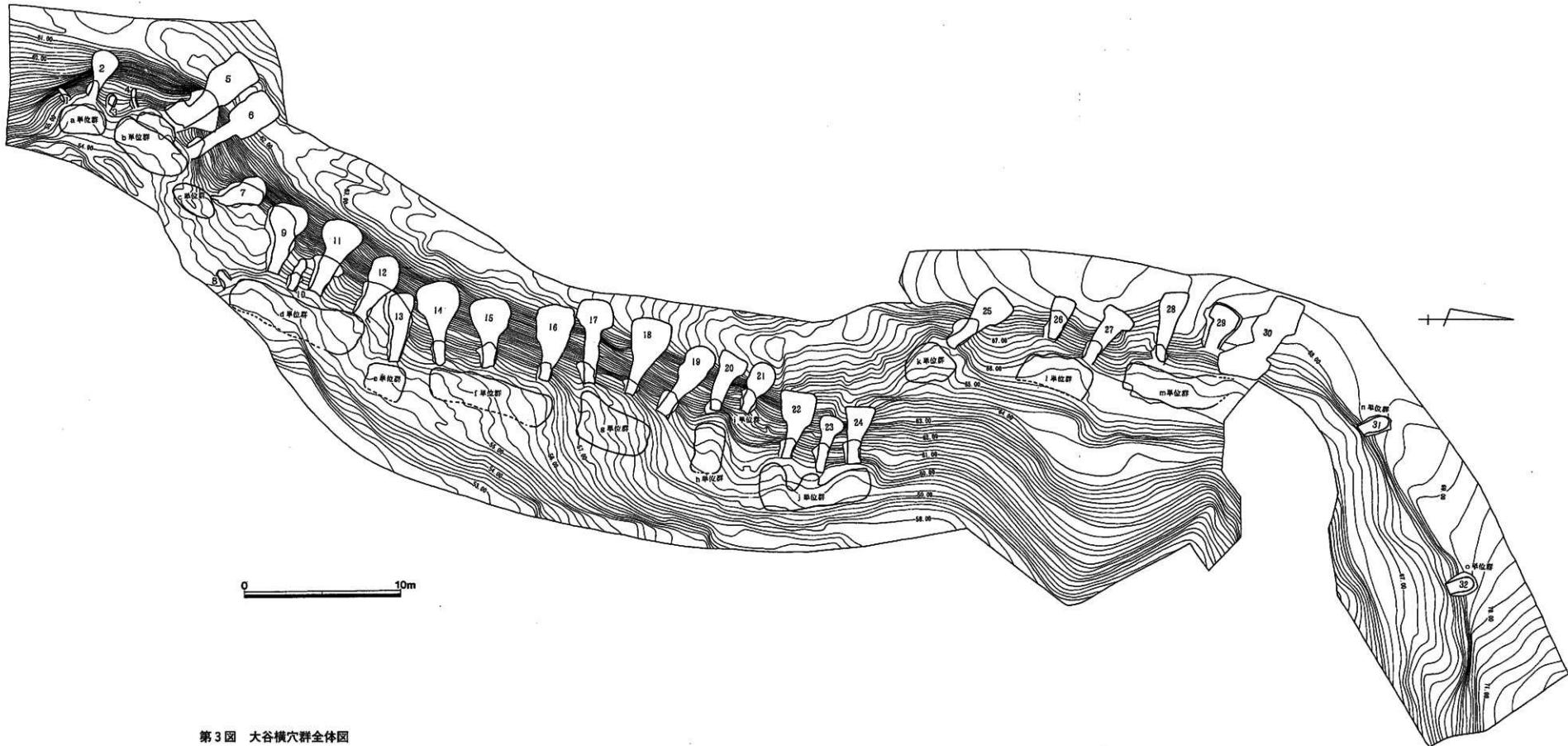
以上述べてきたように、大谷横穴群周辺では、弥生時代以降逆川流域の開発が進み、人々は沖積地、丘陵地へとその活動の場を拡大していったといえる。



第2図 周辺遺跡分布図

遺跡地名表

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	大谷横穴群	11	正源庵古墳群	21	高畠遺跡	31	谷ノ坪Ⅱ遺跡
2	大谷古墳群	12	五平屋敷古墳	22	山郷山横穴群	32	安養寺Ⅲ遺跡
3	鍬谷横穴群	13	峯山遺跡	23	山郷山遺跡	33	大六山遺跡
4	中屋敷横穴群	14	寺峯遺跡	24	山郷山古墳群	34	踊原遺跡
5	中屋敷古墳	15	古明遺跡	25	宮脇古墳群	35	大藪遺跡
6	御堂ヶ谷横穴群	16	下河原遺跡	26	西田横穴群	36	大藪古墳群
7	谷通横穴群	17	神子地遺跡	27	山口遺跡	37	藏人谷古墳
8	元屋敷遺跡	18	天神遺跡	28	深谷遺跡	38	原ノ前遺跡
9	神明横穴群	19	堂下遺跡	29	安養寺遺跡		
10	峯山古墳群	20	中西遺跡	30	安養寺Ⅱ遺跡		



第3図 大谷横穴群全体図

## IV 調査の成果

今回の調査は、平成10年度に行われた調査区北側、谷の最も奥にあたる地点である。前回行われた調査区は、調査時には工事が未着工であり、横穴群は完掘状態のまま残されていた。今回はA-29号の北側から調査を行った。横穴の番号は、前回の調査からのものを引き継いだ。今回は、破壊され形状をとどめない横穴の痕跡を1つと横穴2基を検出した。

### 30号横穴（第3・4図、写真図版3）

29号横穴の北に位置する。巾0.8m～1.2mにわたり岩盤が掘りこまれているものの、横穴の形状はいびつである。奥行きは、調査区外へ続いている。標高は床面で約67mである。浮いた状態で20～30cm大の石が出土したため横穴が存在したと確認した。墓前域の確認はできなかつたが、位置関係からm単位群に属するといえる。

散乱する石の下より須恵器の坏蓋が1点出土した。口径9cm、器高3.9cmを測る。口縁部内面には浅い沈線が巡る。遠江編年のIV期後半（7世紀中葉）に位置づけられる。

### 31号横穴（第3・4図、写真図版3）

31号横穴は、30号横穴より6mほど谷の奥に入った地点に位置する。天井部は崩落していた。検出時で奥行き1.9m、中央部巾0.8mを測る。標高は床面で約67.1mである。平面形態は玄室と羨道部の区別のない筒形を呈しているが、搅乱を受けていることから全長は、もう少し長かったと推測される。

2は31号横穴手前の埋土から出土した有台坏身である。31号に伴っていたと推測される。口径14.5cm、器高4cm、底径10cmを測る。底部にヘラ削りが施されている。V期（8世紀前葉）に位置づけられる。

### 32号横穴（第3・4図、写真図版4）

32号横穴は31号横穴から約10m離れた谷の最も奥に位置する。天井部は崩落していた。奥行き1.7m、奥壁巾0.7m、中央部巾0.8mを測る。標高は床面で68.3mを測る。大谷横穴群の中で最も高所に位置する。31号同様に平面形態は筒形を呈する。玄室内には80cm四方に20～30cm大の円礫が敷かれており、石のない東壁付近に長頸壺が出土した。これは口径8.6cm、胴部最大径13.8cm、底径7.1cm、器高18.9cmの完形品であった。頸部は、ゆるやかに外反し、口縁部はわずかに下方に延びる。肩部は大きく張り胴部下半にヘラ削りを施している。IV期末葉に位置づけられる。

### 遺構外出土遺物（第4図）

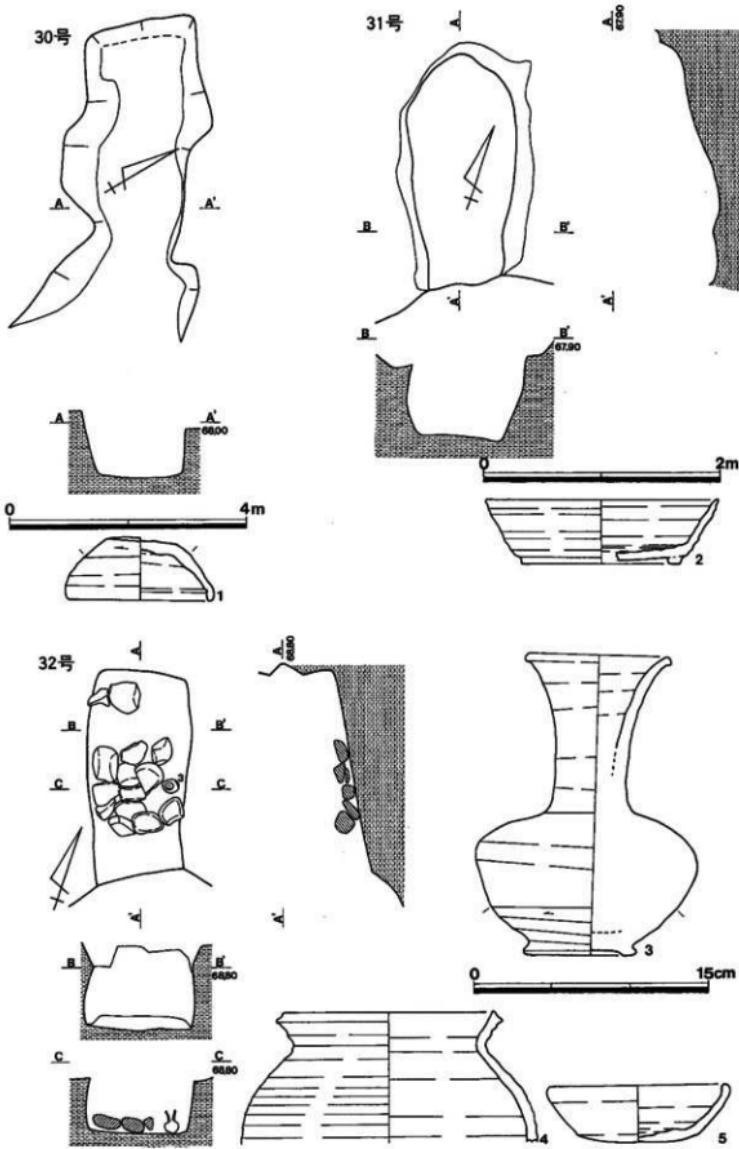
4・5共に横穴周辺の地山検出時に出土した。4は、口径13.1cmの広口壺である。図示しなかつたがヘラ削りを施した体部下半の破片も出土している。5は、口径11cm、器高3.6cmの坏身である。天井部は未調整である。IV期後半に位置づけられる。

### 確認調査出土遺物（第5図）

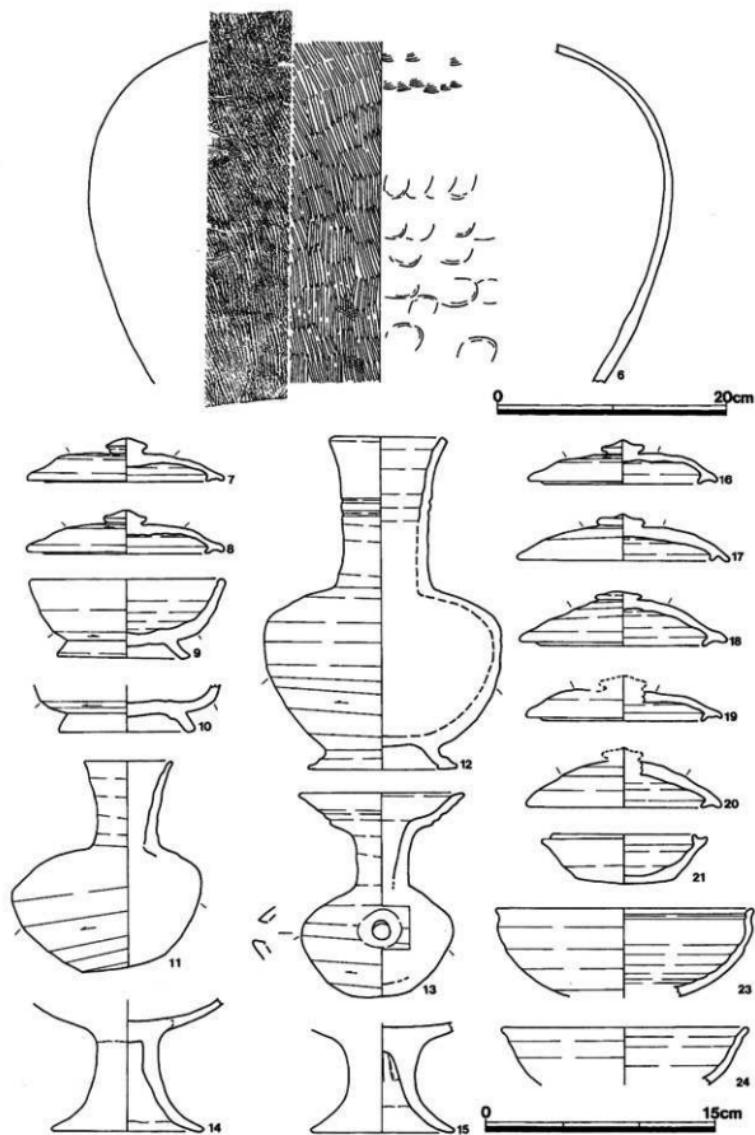
平成5年に実施した確認調査において出土した土器を第5図に示した。これらの土器群は、どの横穴に伴うものであるか明確にできなかつたが、今回の調査地点から離れた横穴の墓前域から出土した。

6は、大甕の体部である。口縁部、底部は欠損している。7～15は一括資料である。7・8は坏蓋である。7は、口径10.4cm、最大径12.6cm、器高2.8cmを測る。扁平な宝珠つまみをもち天井部は浅い。内面のかえりは、わずかに外反している。天井部には緑色の自然釉がかかる。8も7とほぼ同サイズであるが、内面のかえりは7より明確に外反している。9・10は有台坏身である。9は口径10.6cm、底径8.2cm、器高5.2cmを測る。10は底径8.6cmである。ともに高台はハの字に開くものである。

11は平瓶である。口径5.6cm、最大径12.2cm、器高14.6cmを測る。口縁部はゆるやかに外反してい



第4図 30・31・32号実測図及び出土遺物実測図



第5図 確認調査出土遺物実測図

る。12は有台の長頸壺である。口径6.8cm、最大径15.1cm、底径9.5cm、器高21.4cmを測る。口縁部はゆるやかに外反し、口唇部には面をもつ。頸部に二条の沈線が施されている。高台は短いが一度屈曲しハの字形に開く。13は壺である。口径10.5cm、胴部最大径9.8cm、器高13.2cmを測る。注口部の突出は少ない。14・15は土師器高坏である。14は底径9.8cm、15は9.2cmを測る。脚部は大きく外反し、端部を丸くおさめている。これらの一括資料は、IV期末葉に位置づけられる。

16~21は一括資料である。16~20は坏蓋である。16は口径10.1cm、最大径12.1cm、器高2.8cmを測る。扁平な宝珠つまみをもち、天井部は浅い。内面のかえりは、わずかに外反している。17は口径11.4cm、最大径13.5cm、器高3cmを測る。扁平な宝珠つまみをもつ。外面には緑色の自然釉がかかる。18は口径10.6cm、最大径13.3cm、器高3.5cmを測る。天井部はやや高いが、つまみは扁平宝珠形である。かえりはわずかに外反する。19・20は天井部が欠損している。19は口径11.5cm、最大径12.6cm、20は口径10cm、最大径12.2cmを測る。かえりはわずかに外反する。21は坏身である。口径9.2cm、器径10.6cm、器高3.1cmを測る。立ち上がりは、つまみ出されたような形状である。底部は未調整である。これらの土器群は、IV期後半に位置づけられる。

23・24は半球形坏部の高坏である。23は、口径16.3cmを測る。坏部は半球形で、口唇部内面に沈線が施されている。内面には自然釉がかかる。24は、口径15.6cmを測る。23に比べ坏部は、やや浅い作りである。23と24はともにIV期に位置づけられるが、23は坏部の作りが深いことからやや古いものかもしれない。

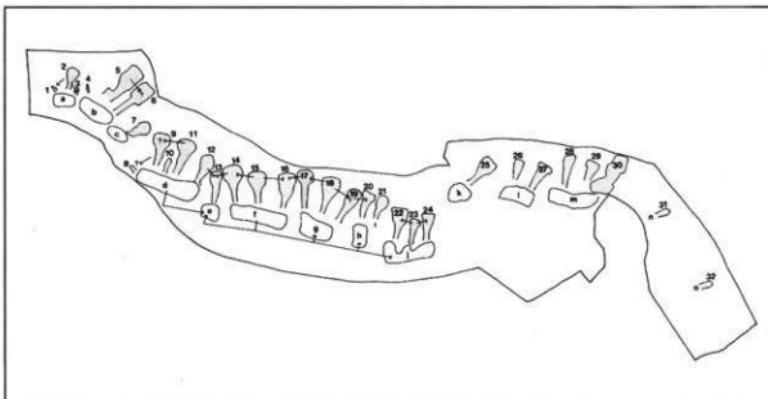
## Vまとめ

今回の調査では、横穴の数は少ないものの大谷横穴群の全容を確認できる資料を得ることができた。まず第1にm単位群が3基で構成されるということである。平成12年の報告の中で29号横穴の北側に別の横穴が存在することを推測しているが、それを確認することができた。

大谷横穴群は7世紀初頭から中央に位置する15号横穴から築造が始まり、左右に広がりを見せているが、7世紀前半には多くの横穴が築造されている。横穴が古くから開口し盗掘を受けていることから、時期を明確にできないものもあるが、南端と北端に位置するa単位群、n・o単位群が当横穴群の終焉にある。31・32号横穴の築造は7世紀末と遅い。そして1基ずつ単独で単位群を構成している。調査では墓前域を確認できなかったが、墓前域があった可能性もある。また、これらの2基の横穴は、m単位群までが南東に開口しているのに対し、ほぼ真南に向かい開口している。そして、玄室の平面形態であるが、m単位群まで隅丸方形に近いものから羽子板状のものと様々であるが、31・32号横穴は明らかにそれらとは異なっている。規模も縮小され、玄室と羨道との区別のない筒形となっている。1・3・4・8・10号横穴はミニ横穴と認められるものであるが、これらは各単位群に含まれるもので、1基単独で存在することはない。平面形態は同様に筒形を呈しているが、その在り方から性格を異にすると考えられる。32号横穴をみると、長頸壺は床面上に正位の状態で置かれており遺体を安置できる幅は60cm弱しかなく、木棺による埋葬が可能か否か判断に難しい。火葬の導入も考慮しておく必要があろう。終末期の横穴の様相は、春岡横穴群（袋井市）や南坪横穴群（掛川市）で確認できる程度で、遠江では例が少ない。大谷横穴群の31・32号横穴は8世紀に近い築造で終末期の様相を示すといつてよいであろう。

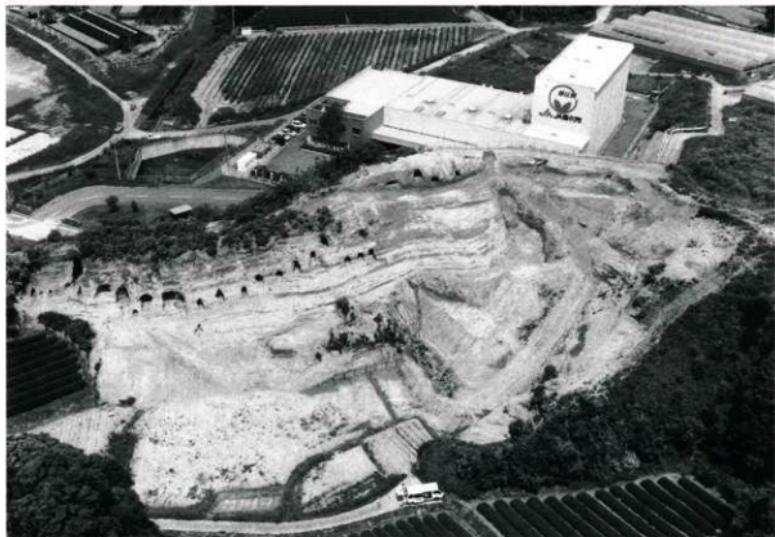
横穴変遷表

番号	単位	Ⅲ期末	Ⅳ期前	Ⅳ期後(古)	Ⅳ期後(新)	Ⅴ期初
1		不明				
2	a					
3						
4		不明				
5	b					
6						
7	c	不明				
8		不明				
9						
10	d	不明				
11						
12						
13	e					
14						
15	f					
16						
17						
18	g					
19		不明				
20	h					
21	i	不明				
22						
23	j					
24						
25	k					
26	l					
27		不明				
28						
29	m					
30		不明				
31	n					
32	o					



第6図 横穴変遷図

写真図版 1



大谷横穴群全景（東から）



発掘区全景（南から）

写真図版2



調査前遠景

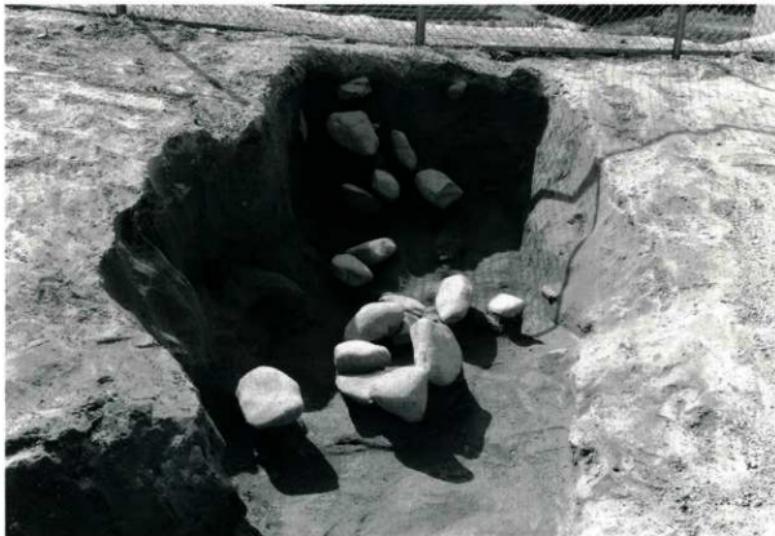


重機掘削風景



31号横穴検出状況

写真図版 3

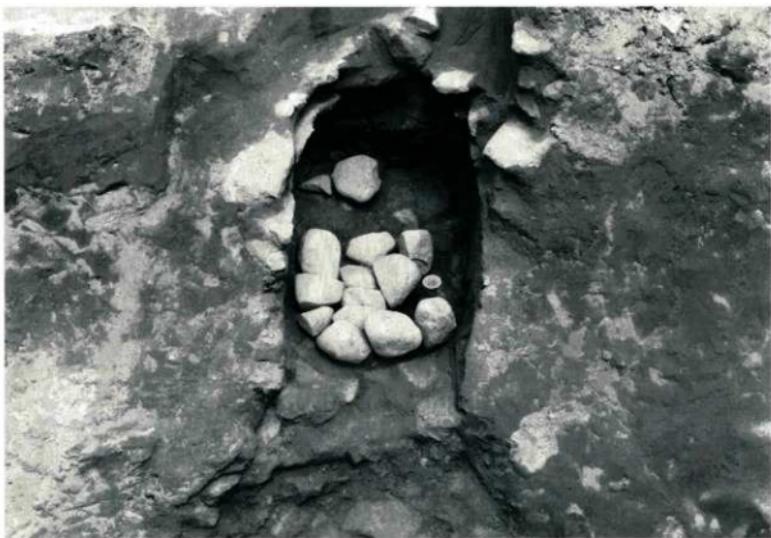


30号横穴残（東から）



31号横穴完掘（南から）

写真図版 4



32号横穴（南から）

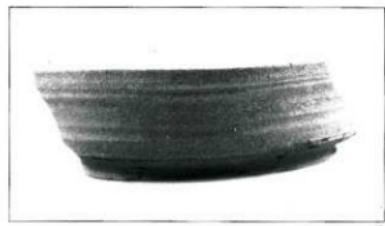


32号横穴完掘（東から）

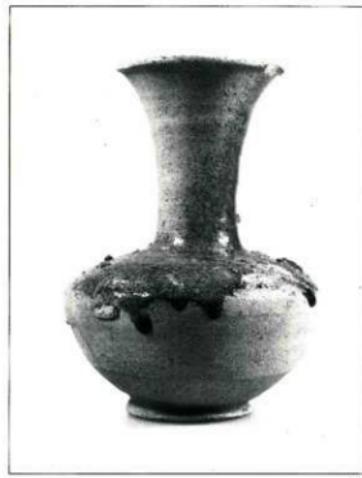
写真図版5



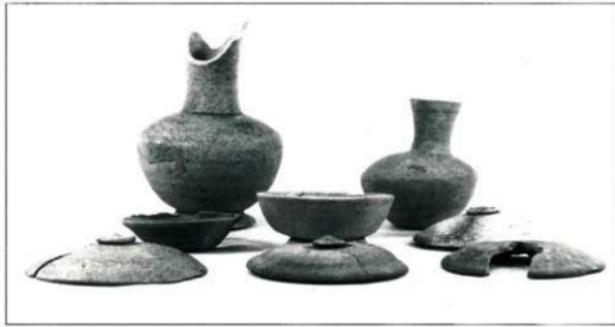
1



2



3



12 11  
21 9 18  
17 16 19



13 14 15  
8 7



## 報告書抄録

ふりがな	おおやよこあなぐん							
書名	大谷横穴群							
副書名	掛川市農協製茶工場用地増設に先立つ埋蔵文化財発掘調査報告書							
編集者名	井村広巳							
編集機関	掛川市教育委員会							
所在地	〒436-8650 静岡県掛川市長谷701番地の1 TEL(0537)21-1158							
発行年月日	2001年3月15日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大谷横穴群	静岡県掛川市 千羽字八重川	22213	317	34度 47分 18秒	138度 03分 15秒	19990416 ～ 19990602	540m <sup>2</sup>	用地増設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
大谷横穴群	古墳	古墳後期	横穴	須恵器	横穴3基			

### 大谷横穴群

2001.3

編集発行 掛川市教育委員会  
掛川市長谷701-1  
TEL(0537)21-1158

印 刷 株式会社 彩光堂  
掛川市宮脇248-1  
TEL(0537)24-0013